



夏の雲は忘れない」を通して

～本校の考える平和教育とは～

広島なぎさ高等学校
教諭 堀内 和徳

1.はじめに

広島では夏になると多くのメディアで原爆に関する特集が流れ、平和への誓いを新たにす。未来を担う子どもたちが平和について学ぶことは学校教育の使命の1つである。本校人間科の授業や行事を平和教育の視点から捉え直してみたい。

2.戦争体験の継承に向けた取り組み

広島にある学校として、世界にはばたく生徒たちに原爆についての知識、考えはしっかり持ってほしい。そのような思いから、中学3年生の「人間」の授業で被爆者の方の講演を聴く機会を設けている。この単元では、人間関係や衣食住に関わる身近な問題から環境や自然保護、戦争のような様々な問題を解決することが平和な世界をつくることにつながることを学ぶ。

また、2017年には民間検閲と長崎の原爆を扱った演劇を鑑賞し、「ナガサキ」について知るとともに、戦争中の一般市民の生活についても学んだ。他にも、2016年から18年まで中学1年生の夏遠足を実施し、宮島から平和公園までを船で廻ることで当時元安川を埋めたという被爆者に思いを寄せたり、平和祈念館で被爆者の方の話を聞いたりして、「ヒロシマ」について学ぶ機会を設けていた。

3.夏の会との出会い

2012年、本学園鶴衛理事長が理事長を務める公益財団法人ヒロシマピースセンターから、日本を代表する女優たちが集まった「夏の会」という

団体があり、彼女たちが地元の子もたちと一緒に作る朗読劇『夏の雲は忘れないーヒロシマ・ナガサキー九四五年』という作品があるので、本校の生徒に参加させてはどうかと提案があった。作品は、広島や長崎で被爆した小学生ら約30人の手記と、占領軍として原爆投下後の長崎に入り、その破壊力を記録した米国の記録映像作家ジョー・オダネルの言葉をつないだものである。校内で検討し、感性が鋭く人格形成期の初期にあることと、人間科で原爆を扱っていることから中学2,3年生で実施することとなった。当初はピースセンターの主催で、単年実施の予定だったが、その迫力と強いメッセージに圧倒され、その後は本校主催で隔年実施することとなった。

4.参加生徒の変化

朗読する生徒は対象学年から立候補を募り、オーディションで選考した。被爆者や戦死した親族がいる生徒、プロの女優と一緒に舞台に立ちたい生徒など、参加理由は様々である。選ばれた生徒たちは台本を手にし、読み耽る。それぞれの手記に込められた思いを感じ取り、それを伝えようと練習する。マイクを使わず自分の声で届け



シエルホールで練習

るため、大きな声で丁寧に朗読しなくてはならない。感情を込めすぎてしまうと朗読者の言葉になってしまい、手記を書いた人の気持ちに聞こえない。生徒は葛藤しながら練習を重ねる。ある生徒は、4歳の時に広島で被爆し、2ヶ月後に父親を亡くした小学4年生の手記を読んで、「子どもにこんな壮絶な体験をさせるなんて」と、その悲惨さを伝えたいと考えていた。また、ある生徒は、小学5年生の時に原爆資料館を見た、被爆した乳児の写真が忘れられずにいたが、その翌年に祖母を亡くしたこともあり、「身近な人の命が失われる悲しさを感じ、朗読劇で当時の人たちの思いを代弁したい」と思っていた。皆、手記を通して原爆や戦争と自分をつなぎ、観劇する生徒たちに作品に込められた思いを届けようとする気持ちが湧き出していた。

朗読後の感想からも、「自分は戦争のことを伝えてもよいのか不安だったが、朗読劇を通して積極的に伝えていこうと決心した。」「戦争を知らない私が読んでもいいものかと悩んだが、女優さんたちの熱意を感じ、原爆の辛さを知らないからこそ、手記を書かれた人々の気持ちを伝えなければならない」「思い出すのも辛いであろう戦争の記憶を何度も掘り返さなければならぬ女優さんたちの気持ちを知り、その思いに応えるためにも絶対に戦争を繰り返してはならない」「僕たち若い人がやらなければならないことは『言葉だけの平和』ではなく、世界中の人々が幸せに暮らせる社会を作っていくことだ。世界中の人々が目を覚ま

し、原爆と戦争の記憶を風化させず、本気で平和を目指して務めていくことが大切だ」のように、戦争や原爆について知り、悩み葛藤しながら取り組んだことで、生徒自身の中にしっかりとした考えが育ち、行動する気持ちが芽生えていることがわかる。



ウハール(アステールグラーゼ)

5.西日本豪雨と活動の終了

昨年の朗読劇は、西日本豪雨によって中止となってしまった。準備してきた生徒にも残念な思いをさせてしまい、なんとか公演が実施できないかと検討している時に、衝撃の事実を知る。34年続けてきた原爆手記朗読活動を、女優達が2019年で終わると発表したのだ。ほとんどの女優が戦前生まれであり、体力的に難しくなっていた。しかし、彼女たちの思いを一人でも多くの人たちに伝えたい。思いを感じとった人たちが他の人へ伝えることで、彼女たちの思いが広がっていく。夏の会の思いに本校が応えることはできないかと考え、1日2回の公演をお願いしたところ快諾を得た。こうして、今年度は1～4年生が皆観劇する機会をいただいた。終演後の交流会では、朗読生徒だけでなく、観劇した生徒たちも一緒になって女優さんたちの

思いを直接聴くことができた。原爆、戦争への思いだけでなく、フクシマも核の犠牲であること、人間と核との関わり方を真剣に考えなくてはならないことも学んだ。

こうした学びを通して生徒たちが戦争や原爆への思いを新たにし、広島に集う若者としてヒロシマ・ナガサキ・フクシマを理解し、「夏の会」の思いを多くの人たちに届け、平和な世界をつくる人になることを期待している。

6.本校における平和教育とは

ここまでは直接戦争を扱った学習活動について述べてきたが、本校では戦争や原爆について学習し、平和を訴える活動だけを平和教育と位置づけてはいない。そうした平和教育は、戦争や原爆を非日常的な特殊な体験と位置づけてしまい、生徒の生活や生き方につながりにくいと考えているからである。

本校人間科では、自己形成、他者との共生、社会理解の3つの柱の上に自己実現がなされ、その先に平和で豊かな社会が築かれると考えている。この考えを全教職員が共有し、生徒と6年間を共に過ごす。本校入学時の人間科オリエンテーションでは、生徒が理解しやすいよう、みんなが幸せな世界が平和で豊かな社会であり、それを実現する人になろうと紹介する。学校生活では、学習やクラブ活動などで人と関わり合うことで自分や他者を理解し、ともに問題を乗り越えることで達成感を得る。これが平和で豊かな社会の最も身近なものである。戦争は乗り

越えるべき大きな問題の1つではあるが、問題の根本的な原因とその解決のヒントは日常の生活の中にある。原爆ドームが広島の日常にあるように、生徒が通う6年間がすべて平和教育であると考えている。

7.終わりに

民間検閲を扱った演劇鑑賞では、戦争により表現の自由を妨げられていたことから、人権的な視点をテーマにした。夏遠足や被爆者の方の話、原爆手記朗読劇では、原爆の恐ろしさだけでなく、亡くなった方や生き残った人たちの気持ちに思いをはせる力を学習の視点としている。また、5年生の研修旅行の一部では、戦争の痕跡をたどり、人々がどのように戦争と関わってきたかを学び、戦争に対する自分の考えをさらに深めることができる。戦争にしろ、平和にしろ、価値観とは生徒自身が自ら培うものであり、教員が教え込むものではない。人間科はその根拠となる事実や多様な視点を生徒たちに提供し、身近なところから平和で豊かな社会を実現するために行動できる人を育てることを目標として取り組んでいる。



出演者集合写真



女優さんたちとの交流会